A B A

“重労働”からの解放

生分解性マルチフィルム

現地ルポ

生分解マルチを使用した畑

千葉県成田市は、空の玄関口である成田国際空港で知られているが、良質な農産物を生み出している地域としても有名だ。そこからほど近い多古町で農業を営む押方政治郎さんは、トウモロコシやカリフラワー、ブロッコリー、かぼちゃ、白菜などを安定的に生産している。多品種を生産する押方さんの作業を支えるのは、利便性に優れた生分解性のマルチフィルムだ。

押方政治郎さん（46歳）は、28歳の時、就農を決意。海外へ農業研修に行くなど就農への準備を行い、環境が揃った多古町で圃場を構えた。いまでは、約1haの規模で多くの作物を栽培している。押方さんの生産物は、同じ地域にある流通販売団体に出荷され、全国の飲食店、ショップに運ばれている。

以下、押方さんへのインタビュー。

押方さん

――生分解性マルチフィルムを使うきっかけは。

「以前は、ポリマルチを使っていて、生分解性マルチのことは知ってはいたが、サンプルで頂いたことがきっかけで、使ってみた」。

――実際使ってみてどうだったか。

「いままでやっていたマルチをはぎ取る手間や処分のコストなどが一気に解消されて作業がすごく楽になった。とくに、マルチをはぎ取る作業は重労働で時間もかかっていたから、その側面への影響は大きい。それに、土の中で分解されるから、環境面へのメリットがあるのも地球環境のことを考えると素晴らしいと思う」。

――今後の展望は。

「安定的に作物を生産するのはもちろんだが、品質・収量を上げていきたい。そのためにも、労働力や時間が省力化できる生分解性マルチはなくてはならない資材だ」。

◇

「生分解性マルチフィルム」は、土壌の微生物によって水と炭酸ガスに分解される生分解性プラスチックを原料としたマルチフィルム。収穫後に土の中に鋤き込めば分解・消滅するので、剥ぎ取りや廃棄物処理が不要で省力化できる。また、マルチにからむ根の処理も不要でトウモロコシや大根をはじめ多種多様な作物に使用されている。マルチの剥ぎ取り作業がなくなることも魅力のひとつ。

特に、機械化の進んだ産地では、茎葉を刈り取って直ぐに機械収穫でき、マルチをはぎ取る時間と労力が不要になる。

生分解性マルチフィルムのメリットは、利用者全員が認めているが、課題は価格面。しかし、現実には、そのことよりもメリット面の多いことが利用者を引き付けている。